

日本語版への序文

この小さな本は、長い時間をかけて作られたものだが、2014年に初めて英語で出版されて以来、これまである程度の重要な進展も見られた。この本は、すでに亡くなられた方も含め、多くの偉大な人々のおかげで誕生した。特にAJR グルーム氏は、私をこの道へと導いてくれた恩人に他ならない。その後私は、職業人生のすべてを紛争の影響を受けた社会における平和創造に関する問題に費やし、その内のいくつかの地域で生活し、その周辺を広範に旅してきた。私はかなり前より、私たちの多くが、遠い昔、あるいは最近の戦争の影響を受けているにもかかわらず（また、戦争が私たちに与える影響にしばしば気づいていないのにもかかわらず）、平和創造に関する知識は非常に限られていることに気づいていた。平和創造に関して、それはしばしばハイレベルなプロセスにだけに光が当てられ、その他はあまり顧みられないか無視されている。平和と戦争の緊密な関係によって引き起こされるパラドックスは魅力的であり、その多くは未解決のままである。この分野で30年近く研究を続けてきた私は、この小さな本を通じて、広く共有されている平和創造の実践について学んだことをより分かり易く整理し、広めることを試みたいと思った。

勝者の平和、力の均衡、平和維持、調停、交渉、外交、民主的平和などに関する長年にわたるよく知られた議論や実践とは別に、私は、平和を支える多くの目に見えない社会的プロセスについて理解が深まり、研究が増えていることを明らかにしたいと思った。このような作業は、しばしば最も困難な状況の中で行われる。そのために私は、デイヴィッド・ミトラニー、ジョン・バートン、ケネス&エリス・ボールディング、ジャン・ポール・レデラック、そしてより最近では、批判理論、フェミニズム、ポストコロニアリズムといった、より広範な批判的知識集団の長年の研究成果を活用した。私の研究は、多元主義、和解、持続可能性のために、被抑圧的で日常的、そしてハイブリッドな平和創造の行為主体が持つ幅広い意味を強調するとともに、平和創造の手段をめ

ぐる国家的・国際的な限界も明らかにするよう努めた。

最近になってようやく注目されるようになったここ数十年の、凍結され、失敗した数多くの平和プロセスを見てほしい。それ以前の日常的な平和への関わりが、歴史を通じて、平和創造に対するエリートや組織的なアプローチが行き詰まったときでさえも、進化を遂げてきた。そのような平和への関与は、戦争や暴力の長年の遺産である社会のローカルな慣習に組み込まれることもあれば、(日本のように)一国の潜在的な平和主義的政治文化や憲法全体に組み込まれることもある。最も注目すべきは、平和の手段や枠組みはまた、協力、外交、法、政治、経済などの国際システムにも組み込まれてきたということである。このことは、カントをはじめとする多くの学者たちが18世紀にすでに気づいていたことであり、F.H.ヒンズレーが1962年に発表した『権力と平和の追求』という優れた研究の中でも指摘されている。このような平和創造の手段とその統合は、国家システムを超越しようとするものであり、歴史全体を通じて重要である。地域的な共同体は、限定的な方法で暴力を禁止し、小規模な地域紛争のための基本的な平和創造手段を開発し、はるかに大規模な平和創造、正義、国家改革に関する新たな理解を生み出すことができるかもしれないが、しかし逆説的に、これが国際的な援助によってのみ達成可能であることは明らかである。

平和研究者たちは、市民社会のネットワークや学問が平和創造のヴィジョンを先導し、19世紀から20世紀にかけて何度か起こったように、戦争が勃発したり、時代遅れの平和創造の手段が失敗したときに、エリートたちによってそれらが準備されてきたと長い間考えてきた。こうしたダイナミズムは、絶え間ない革新を必要とするが、地域戦争や世界戦争といった体系的かつ極めて危険な紛争の後でなければ、そうした革新がもたらされることはほとんどなかった。しかし、これまでに生まれた平和秩序は、非常に実体のあるものである一方で、未だ非常に脆弱であり、よく理解されているとも言えない。実際、本書が示すように、平和秩序は複雑化すればするほど、不安定になるものである。最近の研究では、社会契約や世界秩序を再構築する政治社会的・歴史システムのプロセスとしての平和創造に大きな注目が集まり始めており、消極的/積極的、あるいはリベラルな形の勝者の平和から、日常的でハイブリッドな、そし

てグローバルで世代間倫理を考慮した、より解放的で持続的、かつ公正な形の平和へと議論が移しつつある。

したがって、このような複雑な知識を、専門家以外のより多くの一般読者に届けることは非常に重要であり、本書はそのために生まれた。さらに、20世紀の全体戦争が終結して以来、平和に関する知識の発展や平和創造の手段の進化は加速しているものの、既存の手段やアプローチの多くが行き詰まっていることは明らかである。最近のウクライナにおける和平プロセス失敗後の戦争の勃発が示しているように、ますます拡大する戦争や紛争、政治的暴力に対処するためには、政治的エリートではなく、市民社会、学者、科学者に期待されるような実質的な技術革新が再び求められているのである。平和創造における新たなイノベーションを生み出すためには、平和創造に関するより広範な知識と、こうした閉塞感を克服するための横断的かつ国家を超えた持続的な努力が必要であり、本書がこの大事業を少しでも支えることができればと願っている。